
出会いは螺旋のように

密 七月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出会いは螺旋のように

【Nコード】

N5488V

【作者名】

密 七月

【あらすじ】

超能力者たちが、必然のように出会う。

その出会いは始まりで、過去、未来にも重要な出会いはあった。どこで出会ったのか。どこで出会うのか。

交錯する人の繋がりの中、最後に知るのは幸せだった。

1 約束

「一緒に暮らさない？」

それは甘い誘惑だった。中学生では実現不可能だけど、それが出来たら幸せだった。

隣のクラスの男子、速水零^{はやみれい}は薄い笑みを浮かべて手を伸ばした。

「もちろんすぐには無理だけど。男女が暮らすっていうのも問題だしね。でも、いつかは」

零との間に恋愛感情はない。そんなものではない、特別な仲間意識があつた。

初めて出会った、超能力を持つ仲間。運命のように、感応系の能力を持った仲間だった。

彼に出逢えて良かった。それだけで救われた。

「僕の未来に君はいる？」

「いるよ。あなたの隣に私はいる。あと二人、近くにいる」

零の手に触れて『見えた』のは、私が居る未来だった。他にも二人、一緒にいた。

未来予知。生きている対象物に触れることで、その物の未来が見える。見えないように制御も出来るが、それは完全ではない。見たなくとも、頭の中に入ってくるがあつた。強い感情を伴った未来は、触れなくても見えることがある。

その能力は私を苦しめた。悪い結果を予知しても、変えられないことが多い。警告しても怪しまれるだけだった。そして、予知通りのことが起こると、私に非難の矛先が向かった。予知を『呪い』だと言われたこともある。百パーセント当たる予言は、恐怖の対象だった。

反対に、予知を悪用されそうになったこともあつた。株や競馬の予想、政治家の動向などに利用されそうになった。しかし、私の対象は『生きているもの』に限られたため、実際上手くいった試しは

ない。『馬』や『政治家』に触れない限り、予知はできない。その『条件』を知られないように、細心の注意を払っていた。

そんなことがあったからこそ、今まで能力を隠してきた。悪い予知は相手にさりげなく警告し、自分で出来る範囲で危険を回避させる。

それは自己満足だと、わかっていた。

「君は優しすぎるからね。だからこそ、人を救える。僕も救われた」
「私も救われた。あなたの『過去透視』が、私を見つけてくれた」

『過去が見える』零も、その能力に苦しんだに違いない。過去は変えられないから、私よりも辛いだろ。

でも、『過去が見える』からこそ、出逢えた。私の過去に『未来予知』があったから、零は私に声をかけた。

私と反対の能力。私と対になる能力。

「あなたという未来のために。いつか、きっと。一緒に暮らせるよね」

「遠くない未来に」

私の予知は二年以内に起こる未来だった。二年以内。高校二年生の秋までに、他の二人と出逢って一緒にいる。

高校生になったら家を出るのは簡単だと、予知しなくてもわかっていて。私のことを、両親は気味悪がっている。不吉なことを言う子だと、いち早く気付いたのは近くにいた両親だった。ただ、それが『未来予知』という能力であることは知らない。普通じゃない、とわかっていただけけど、それは真実だ。

最近になって、母の弟夫婦の養子になる話が出ていた。叔父夫婦には子供がいらない。両親も、私を手放せるならと、『私の変なところ』のことは話していない。叔父さん達も、私のことはただの聡い子、と思っている。

実親から養親に変わっても、未来は変わらない。

私も、これ以上家族を苦しめなくなかった。お金を援助してくれるなら、誰でもいい。

「一緒に暮らそう」

繰り返した零の言葉に、手を強く握り締めて頷いた。
中学三年の秋。未来の繋がる約束をした。

2 3人目

「唯ちゃん的能力って別に悪くないと思うけどなー」

両手で湯呑みを持ち、緑茶が冷めるのを待っている柴田さんが、ポツリと呟いた。その姿と感想に、笑みが漏れた。

その感想は、悪いことを考えない人のものだった。簡単に人のせいにしない人だから言えることだ。悪い予知を私のせいにしないで、その回避を自分でしようとする人。自分の行動に責任を持てる人。疑うより、まず信じる人。

柴田さんは、そんな人だった。

「未来は見たくない結果や、なりたくない自分になっている姿を、過去は振り返りたくないもの、隠しておきたいものを知られることになるからね。どっちも嫌だと思われるだろうね」

呉さんの意見は的確だった。そう思われることが多かったからこそ、力を隠している。

呉秀さんくわしゅうと柴田耕平さんしばたこうへい。ある事件をきっかけに出逢った刑事さんだった。私と零の能力を知りながらも、利用しようとしないう。未解決になりそうになったり、無差別な連続的犯行の場合は、力を使って手助けしたりすることもあるけど、それは自分から申し出たときに限った。呉さんたちは、私たちに力を使わせたりしなかった。出逢ってから二年経った今、それは変わっていない。

そんな付き合いは純粋な私的交友で、家に招くほどの親密さがあった。

何故か話の流れで、私と零が一緒に住むことになった経緯を話して、今に至る。

「占いは、予知に似てませんか？」

「確率の問題だよ。絶対当たる占いは、占いじゃなくて予知なんだ。占いは可能性で、予知は確定すること」

呉さんの説明に、柴田さんは「なるほど」と頷いた。

わかりやすい説明だ。私の力は、『確定』だから忌み嫌われる。『可能性』のような曖昧さはなく、『このままだと確実に悪い結果になる』と示されるのは『呪い』に近いのかもしれない。

たとえ、見たくないものを先延ばしにしているだけだとしても。

「でも、知ることによって回避できるんですよね？ 良い力だと思うんですけど」

「ありがとうございます。今は零たちがいるからそう思えますけど、制御できなかったときは大変でした」

「それは私もよ」

幼い声が同意した。源^{みなもねい}怜香、八歳。見た目は普通の小学二年生だけど、精神年齢は高校生並だった。彼女をそうさせたのは、彼女の能力で。精神感應能力、通称テレパスが、怜香を普通の八歳にさせなかった。

物心がついたときから、怜香の周りには人の本音が溢れていて、大半は悪意だったという。その能力は自分だけが持っているものと知ったときには、周りから気味が悪いと言われていた。

私もそうだったけど、怜香は比較できないほど傷ついている。言葉ではなく、心の声によって。

「人の心が読めるから、人を信じられなかった。周りは嘘ばかりだったわ。親でさえもね。でも、唯がいたから。今は制御もできるし、この能力は悪くないって思える」

怜香が笑顔でいられて良かった。私がいたから救われた、という言葉は私を救った。少しでも怜香に幸せになってほしいから、私の予知で導いてあげたいと思っている。

みんなが幸せになれる道はきっとあると信じてる。

「で、話の続きだけど、亮^{あかり}とはいっつ出逢ったの？」

「五月の連休明けに、零が家に連れてきたの」

高校一年の秋。夏から零と同居することになり、やっと新生活に慣れてきたころ、零は『友達』を連れて帰ってきた。

「初めまして、麻生亮あそうです」

目の前で爽やかに笑う顔は、見たことのあるものだった。
零の未来で見た、『他の二人』にこの顔があつて。

あのと看、私は彼の名前を呼んでいた。

「亮……」

思わず漏れた声にハツとした。初対面で呼び捨てなんて、最悪だ。
不快に思っていないか恐る恐る亮を見ると、亮は楽しそうに笑つた。
「これからよろしく、唯」

差し出された手を握るのに迷いはなかった。

大丈夫。力を制御している間は何も見えない。

「僕の力はサイコネシス。モノを動かすというより、モノにかかつている力を変えられるって言う方が正確かな。君の力も教えてくれる？」

零は、私の力を話していなかった。だから、亮は気軽に握手を求めたのかもしれない。手が触れて未来が見えると知つたら、亮はどうするだろうか。

零を通して見た亮は笑っていた。あの未来は、変わらない。

「私の力は未来予知。生きているモノに触ると、未来が見えるの」

亮は、握手をした方の手を握つたり開いたりした。

「じゃあ、僕の未来も見えた？」

「見なかった。制御したから」

「この家で、僕が住んでいるか見てほしかったな」

あっさりと言われた言葉は重く、すぐには理解できなかった。

亮はなんて言つたのか。亮は零の友達で、サイコネシスの持ち主だった。亮のことは零の未来で見ていた。私と亮は笑っていた。
その場所は。

「この家だ……」

「え、何？」

亮の問いに、首を横に振つた。零の未来は、今があるからこそ現実となるもので。今行動しないと始まらない。横で見ている零が楽

しそうに口元を緩めているから。

私が、あの言葉を言う。

「零の未来に、私とあなたがいた。この家で、笑っていたの。だから、今あなたの未来を見ると、その光景があると思う」

「確かめる？」

「それを、現実にするために」

喉が乾いた。一息吸って、声と共に吐き出す。

「一緒に暮らさない？」

3 4人目

「口説かれちゃったわけだ」

呉さんのからかいに、亮は「そうなんです」と返した。口説いたって。そうなのかもしれないけど、そう言われると釈然としない。

「別に、零が言っても良かったんだけど？」

「唯が言ってくれて良かったよ。零からは、唯の許可があったら住んでいいって言われてたから」

初耳だった。驚いていると、柴田さんが「そういえば」と疑問を口にした。

「零ちゃんと唯ちゃんが一緒に住むことになった理由は？ 超能力仲間だけが理由じゃないよね？」

そう言えば言っていなかった。当たり前すぎて、言つのを忘れていた。

過去と未来。相違点は。

「零は私の力を打ち消せるんです。制御が上手くいかないとき、零の力が抑えてくれるんです」

「なるほど。一緒にいると楽になるんだね」

「耕、少しは考えようね」

柴田さんは呉さんに苦笑されて拗ねた。

素直な人だと思う。柴田さんの質問は頭の良い人の質問だから、不快じゃない。言い忘れていた私が悪い。みんなが同じ前提で話しているわけじゃないのだから。

「亮くんは感応系じゃないよね？」

「はい。僕は超能力仲間として、一緒にいたいと思ったんです。同じ超能力を持つ者なのに、感応系は辛すぎるから。僕にできることで支えたいと思ったんです」

何度か亮に確かめたときに聞いたものと同じだった。感応系はプライバシーを破る。それでも一緒に居ることを選んでくれるのが不

思議だった。見られたくない、隠したいものを暴いてしまうのに。一方的な侵害なのに。

それでも亮は笑っていた。

「怜香のテレパスは、読まれるより読む方が辛いし。それにまだ八歳だから」

人の心が読め、ずっと人の本音を聞いてきた怜香。その辛さは想像できない。想像できたとしても、想像以上の辛さだと思う。

人が傷つくのを見るのより、人の悪意を見る方が辛い。

「怜香のことは予知できなかったんです。『私が出逢った』から」
「そっか。自分のことは予知できないんだっただね」

柴田さんに頷いた。

私の予知は『生きているものに触れる』ことで可能になる。だから、自分の未来だけは見えなかった。

「あのときは、唯だけが信じられた」

あのとき。怜香が私に出逢う前のことを『過去』にできて良かった。出逢ったときの怜香はまだ六歳で、六歳なのにそうは見えなかった。

心を開ざしていた。

ヒステリックな甲高い声に、幼い声が冷静に応えた。声の方を見ると、近くの中学の制服を着た少女と幼女が喧嘩しているようだった。中学生が一方的に怒っているように見える。

その光景に違和感を覚えた。それは、五歳の言葉遣いと態度だった。

「私が盗んだっていう証拠はあるの!？」

「鞆の中にね。『新品のアイライナーとマスカラ』が」

何かを写し取ったような台詞に、少女は怯えた。

あからさまな変化に、思わず歩み寄った。嫌な予感がする。

「なんでアンタが…気持ち悪い！ 化け物！」

少女は鞆を投げつけようとした。教科書が詰まっていると予想される鞆。それが当たればどうなるかなんて、予知しなくてもわかる。鞆から手が離れる前に腕を掴んだ。

「投げちゃダメ」

「でも、この子…なんなの！？ 普通じゃない！ 化け物！」

腕を振り払って少女は走って逃げた。

化け物。それは何度も言われたことのある言葉だった。未来がわかることは恐怖で、畏怖で、異常なことで。

似ている、と思った。

「大丈夫？ 怪我はない？」

しゃがんで少女と視線を合わせた。

金色がかった色素の薄い、緩くウェーブのかかった肩までの髪と、茶色が強い瞳が印象的だった。

あやすように頭に手を延ばすと、少女はビクツと肩を震わせた。

「大丈夫よ。私はあなたの味方だから」

頭に手を乗せた。

確信があった。

化粧品名を言ったことと、それに対する少女の異様な怯え方は、見たことがあるものだった。

この子は超能力者だ。それも感応系。零のような過去透視か、心を読む読心か。化粧品名を言ったから、後者か。

（ねえ、私の声が聞こえているでしょう？）

「…あなたも心が読めるの？」

「お母さんは一緒じゃないの？」

（声に出しちゃ駄目。ここでは、誰が聞いているかわからないから。私は心は読めない。予知能力者。）

「お母さんは家にいるわ」

「じゃあ、送るね」

こくん、と頷いた少女に笑みを浮かべた。この子は能力の危険性

を理解している。

感応系の能力は負担がかかるから、と距離を取ろうと頭から手を離れたが、幼女はその手を取った。彼女が望むなら。

そのまま手を繋いで公園を出た。周りからは、姉妹にでも見えて
いるだろう。

無言で歩いて五分。人通りのない道に差し掛かり、深く息を吐いた。

「私は不知火唯、十六歳。予知能力者だよ」

「私は源怜香、六歳。読心、テレパスよ」

まるで同い年の子と話しているみたいだ。声は幼いが、話し方は
しっかりしているし、応答も速い。

「ずっと大人たちの心の声を聴いてきたから」

怜香は、心の声に応えた。

そうだ。考えていることは怜香に伝わる。私に関することは、考
えてはいけない。

私の過去は、怜香を傷つける。

「あなたの能力使用条件は何？」

「触ること」

同じだ。私も触れることで、予知ができる。触れなくても、近く
で起こる生死に関わる事故を予知することがある。

「私もよ。強い感情は直接頭に流れ込んでくることがあるわ」

能力は零に似ている。零は、触らなくても自由に能力が使える。

「零？」

「一緒に住んでいる仲間。もう一人いるんだけどね」

『過去透視』の零と『重力操作』、『サイコキネシス』の亮。今、
三人で暮らしている。みんな両親はいるけど、超能力者の仲間とい
る。

「私も一緒に住みたいな…」

「両親はいるんでしょう？」

「いる。けど、私が怖いんだよ。最初は平気なフリしてたけど、心の

中では怖がつてたわ。何で私たちの子供がこの子なんだろうって。気持ち悪く思ってる」

握る手に力が入った。似ている。けど、私より辛い。心が読めるということとは、本音を聴くということで。それは制御できなければ拷問だ。

小さい頃は、皆が自分と同じ力を持っていると思っていて。その力が特別だと気付いたときには遅くて。気持ち悪い、異常だ、と畏れられていた。

考えちゃいけない、とわかっていても、私の過去が同調する。全然同じじゃないのに。同じであるはずがないのに。

思考を振り切るために手を放そうとしたが、怜香は強く握り返した。

「放さないで。あなたの心の声を聴かせて。…唯と一緒にいたい」

「…怜香が望むなら。私はあなたのために動く。私があなたの未来に見た『一緒に暮らしている私』を本物にするために」

「私の未来に唯がいるの!？」

「今の段階ではね。その未来を迎えるためにはやるべきことがあるから。だから、怜香。あなたはどうか教えて？」

繋いでいた手を放して正面に立った。向かい合わせで、視線を合わせる。身長の違いなんて気にならなかった。

「唯と一緒に暮らしたい」

「了解」

未来に向かう約束が、交わされた。

4 繋がる

「確か、唯ちゃんと怜香ちゃんは『従姉妹』って言ってたよね？」
「はい。怜香の両親に了解を得て、私は怜香の母方の兄弟の子供、ということにしました」

高校生はまだ子供で、無力だった。両親の庇護がなければ生きていけない。怜香の望みを叶えるためには、嘘が必要だった。

その願いの実現は、思っていたよりも簡単だった。事情を説明すると、怜香の両親は戸惑いながらも同居を許可した。

従姉妹という設定は、母親からの提案で。仕送りは少なくともなく、怜香一人を養うには十分だった。

あのとき、怜香は両親の心の中に何を見たのだろう。

「私は迷わず唯を選んだ。だから、両親が私をどう思おうが関係ないわ。ただ…あの人たちの決断に、少しだけ迷いがあったのは嬉しかった」

どんなに疎んでいても、子供を思う親の気持ちはあった。それは怜香の救いになっただろう。

私に千尋がいるように。

「私は『黒瀬』っていう名字だったんです。『不知火』は母の旧姓で。母方の弟の養女になったんですよ」

これは零しか知らない。亮にも怜香にも言っていなかった。

この場だから言える。私の過去は、零がいたから『過去』にできた。

「母の弟、今の父は、私の力はただの勘だと思っています。母の考えすぎだ、と。父の前では未来のことを話すことはなかったからだと思います。それで、子供が出来ない父と母に引き取られました」

中学の卒業式に養子になった。卒業を祝ってくれたのは、今の両親だった。

本当の私を知らない父と母。それで幸せだった。

「零と一緒に暮らすことは納得してもらっていました。本当の母が、その方が良くと説得しましたから。高校を卒業してから、大学に通う間は一緒に住もうと思っています。四年間だけなら、親子でいられると思いますから」

「四年も離れるの!？」

「四年だけ、だよ」

怜香の詰問に、零は冷静に答えた。別居することは言っていなかった。それは予定であり、未定だから。

大学に進学させてもらうには、資金の負担は軽くしないといけない。

「その間、弟と一緒に住む予定なんです。高校に通うのに便利なので。弟、千尋は私の家族の唯一の味方ですから」

私の能力を受け入れてくれた千尋。未来は変えられることを教えてくれたのは千尋だった。

唯一の味方だった。千尋がいたから、私は家族を裏切らないでいられた。

「唯に弟がいたなんてねー」

「秘密にしていたわけじゃないよ。ただ、千尋のことを話すと、『黒瀬』の話をしないといけなくなるから」

まだ話すのに抵抗があった。『黒瀬』は私を一番拒絶したから。

「えっと、唯ちゃんは『黒瀬唯』だったってことだよな? もしかして、家は五月市?」

「そうですけど…」

柴田さんの様子がおかしかった。嬉しそうな、泣きそうな、複雑な感情が混じった表情だった。

出会ってから二年、柴田さんのこんな顔は見たことなかった。

「唯ちゃん! 君にお礼が言いたかったんだよ! 助けてくれてありがとうって」

柴田さんは泣きそうに微笑んだ。

何かなんだかわからない。ただ、五月市にいた私を柴田さんは知っていることだけはわかった。

黒瀬唯。五月市では、不幸な予言をする子供で知られていた。

「零くん、僕の過去を見てくれないかな？　今から話す内容が間違っていないか、確認してほしいんだ」

「わかりました」

零は柴田さんの手を握った。零の見る過去は真実で、脚色された記憶じゃない。過去に実際起こったことだけが、見える。思い出は、記憶はどこかで改竄されることがあるから、零が見れば真実がわかる。

柴田さんと私の過去。零には何が見えるのだろうか。

「僕が唯ちゃんに会ったのは、高校二年の春だった」

私は小学二年だ。あの頃にはもう、予知の力は隠していた。でも、制御は上手くできなかった。

「唯ちゃんと怜香ちゃんの出会いに似てるんだけどね。あのとき唯ちゃんは、苛められていた」

あのときとは、いつのことなのか。いつも苛められていた気がする。小学二年生は、無邪気に無自覚に人を傷つけた。

「見ていられなくてね。僕は唯ちゃんを助けた」

柴田さんらしい。見て見ぬ振りをしなかった。それだけで、小学二年の私は嬉しかっただろう。油断してしまうくらいには。

「唯ちゃんは、突き飛ばされて膝を擦りむいていた。それで僕はハンカチを渡したんだ」

ハンカチを渡した。接触があったということだ。

あのときの私なら、きつと。

「そのとき、ビクッって震えられて。あのときは傷に触れたかな、と思ったんだけど、今ならあれが予知だったんだってわかるよ」

きつと予知したはずだ。上手く制御できない上に、優しさに油断していたなら。

私はそれで、何を見たんだろう。

「いきなり『次の信号を渡らないで！ あなたは車に轢かれる…一回だけ、青信号を渡らないで』って言われて。確かに気味が悪いと思っただよ。不吉なことをいう子だなんて」

それは素直な感想だった。いきなり『車に轢かれる』と言われて良い気はしないだろう。

でも、そう言うことでしか、伝えられなかった。

「それで、ハンカチを渡してその場から離れたんだ。それ以上居て不審者に間違われても嫌だったし」

ハンカチを渡してくれただけでも良かった。その優しさは、私を救ったはずだ。

「『次の信号』は、待ち時間が長いことで有名だね。一回見逃すなんて嫌だった。でも、負い目を感じて。僕は立ち止まった」

私の見た未来は、一つのこと回避できる。柴田さんの場合は、『次の信号を渡らない』ことだったわけで。

「交差点に人通りはなくて、僕は一人で立っていた。青信号になって二、三秒後だったかな。信号無視した車が凄いスピードで目の前を走り抜けたんだ」

もし、道路を渡っていたら。その光景を私は見たはずだ。

だからこそ、優しくしてくれた柴田さんに忠告した。

「その車は、交差点で車と衝突した。死者は出なかったけど、重体一名、重軽傷者が五名出た事故だったよ」

「合ってます。柴田さんが見た過去と記憶に差違はなく、話したとおりですよ」

零はするりと手を放した。零は柴田さんが過去で見た事故を見たはずだ。

どんな悲惨な事故だったのか。どんなに最悪で、死者が出るような事故や事件でも、零は表情を変えない。慣れではなく、経験上身に付いたものだった。それは、私も怜香も同じだ。

「あるとき唯ちゃんが言ってくれなかったら、僕は今ここにいないよ。ずっとお礼が言いたかったけど、見つからなかったから。名前

はランドセルに『くろせゆい』って書いてあったのを覚えていたんだ。だから今、ありがとう」

柴田さんの笑顔に、泣きたくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5488v/>

出会いは螺旋のように

2011年8月19日03時34分発行